随　筆

イラクを訪ねて (6)

塙　　輝　雄*

5．6　バスラ

イラク政府発行のガイドブックによると，バスラはアラブ湾から55kmバグダードから552km離れ，シャット・アル・アラブ（アラブ河）西岸に沿い海抜2m，南部最大の都市となっている．ところが，よく調べて見ると55kmは湾岸の町ウム・カースルまでの直線距離らしく，552kmはどうやら最短の路程らしい．念のため我が交通公社が最近発行したガイドブックを調べると，バグダードから583km離れ，アラブ河左岸に広がる海港で，附近には10万本のナツメ椰子が植えられていると書かれていた．583kmという数値はどこから引用したのか判らないが，許容誤差内であるとしてもよいだろう．しかし，左岸は間違いで，海港は誤解されやすく，10万本のナツメ椰子も鵜飲みは出来ない．イラクの資料には850万本とも1000万本以上とも書かれているのである．また，最近朝日新聞社から発行された“シルクロード・旅をする本”のバラスの項には“アラブ河西岸に10万本のナツメ椰子の林がある”と書かれているが正しくは東岸なのである．筆者の見たところ，10万本は多分バラス市対岸の本数で1000万本はバラス行政区全域に対する数値と思われる．筆者のイラク案内も終りに近づいたので，とりあえず日本語のイラク案内には間違いが多く含まれ，現地製のものであっても解釈を必要とする記述が含まれているという実例を挙げておいた．勿論，旅行者に真に役立つ具体的記述は何れも極めて乏しいのは残念である．この事情は他の中近東諸国に対しても当てはまると考えても差し使えない．前置きが長くなったがバスラは対イラク貿易やイランとの関係で重要な地点にあるのでまず地理的な紹介から始めることにしよう．

*塙　輝雄（Teruo HANAWA）．大阪大学工学部，電子ビーム研究施設，教授，理学博士

ティグリス，ユーフラテス両河はバラスの北西約70kmのクルナというところで合流し，Shatt al Arab（アラブの流れ，以下アラブ河と訳すことにする）と名を変える．バラスはこの河の河口から約100km溯った右岸に開けたイラク第2の都市でバグダードから東南に450km離れている．もし海抜2mが正しいとすればアラブ河は勾配によってではなく水量によって流れていると考えた方がよい．海抜8mと書かれている文献もあるが結論は同じであろう．従って河の水位は潮の干満の影響を強く受けて上下し，多数の運河や灌漑用水に流れを生じさせるに役立っている．河の水は塩分を含んでいるとの事であったが，衛生上の観点から口に含んで確かめることはしなかった．因にナツメ椰子は塩分に強い作物で，豊かな水と高温多湿の風土はこの地方を世界最大のナツメ椰子の生産地たらしめているのである．

バスラから40km河を下ると左岸に近代的なイランの港ホーラムシャーがあり，更に20km下るとイランの石油基地，アバダンに至るのである．アラブ河の河巾を正しく見積ることは難かしかったが，河に停泊している1万トン級の商船が河に比して大き過ぎるような感じを受けた．恐らく1km程度であろう．且つてこの河の上空を飛んだとき，アラブ湾から船が数珠つなぎになっているのを見たことがある．さして広くもない河に産油国の三つの港があれば混雑するのは当然で，イラク政府はバスラ港の拡張に加えて，アラブ湾岸の町，ウム・カスルに新港を作りつつあると聞いた．なお一言付け加えれば，イラクの石油の一部はアラブ河口のファオまでパイプで送られ，そこで船積されるそうで，バスラは一般貨物の貿易港なのである．

イランとの国境線は図に見られるように，かなり不自然さを感じさせるもので，政略的な掛

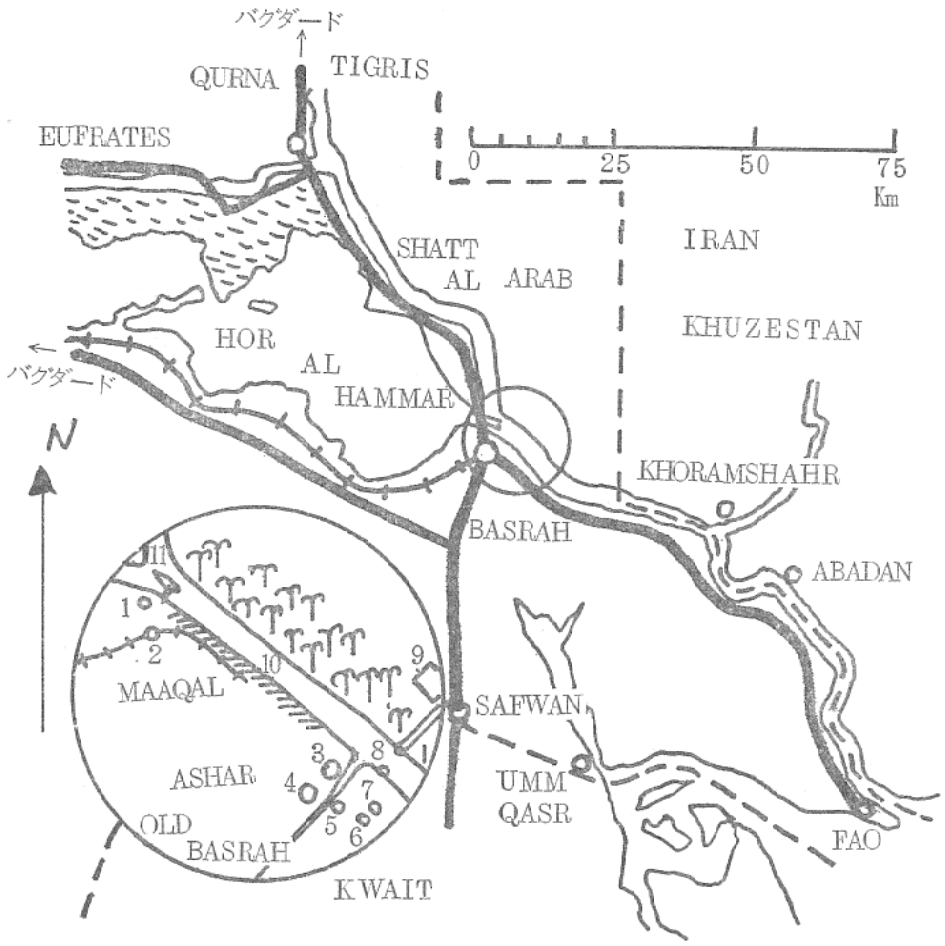

図1　バスラ附近図　円内はバスラ市概念図
1．Shatt Al Arab ホテル（エアターミナル）　2．バスラ駅　3．モスク
4．スーク（市場）　5．Tourism Office　6．International Hotel
7．Raghdan Palace Hotel　8．フェリー桟橋　9．バスラ大学
10．港　11．シンドバッド島　道路　鉄道
ナツメ椰子林　湿地帯　国境

引きの産物と思われる．実際，隣接するイランのフゼスタン州には多数のアラブ人が住んで居り，最近の新聞によれば，イラン人との間に紛争が起きているらしい．またフゼスタンを含め，イラクとイラン双方にまたがり，トルコの一部をも含むかなり広い地域には多数のクルド人が住んで居り，独立，ないしは自治権の拡大を要求して止まない．中近東は古来，部族抗争の激しいところで，14世紀の大旅行家イブン・バットゥータは“ヒラ（バビロンの近くの町）ではクルド族とヒラ族との間の闘争が止んだことはなく，カルバラ（ヒラの近く，シーア派の聖地）ではラヒーク族とファーイズ族とが絶えず闘争を繰り返しているため市街は荒れ果てている．”と語っている位である．このような抗争精神が今なお強く生きつづけているか否かは判らないが，民族問題に根ざした紛争が起る可能性のあるところは大産油地帯でもあることに注意せねばならない．前置きが長くなったのでこれから目を市内に移すことにしよう．

この地を踏んだのは1975年の5月の初旬であった．モースルと同じく沙漠の中の軍用飛行場に着陸し，バスで町外れまで東方に20分，更に市内を北方に20分走ってシャット・アル・アラブホテルに到着した．エアターミナルはこのコロニアル風の古く大きな豪華ホテルに置かれて居り，折返しバグダードに戻る客でロビーは大混雑していた．市内の河岸や運河を彩る緑豊かな木々やナツメ椰子の林は市外に到達するまでの荒涼たる風景からは想像も出来ない程であっ

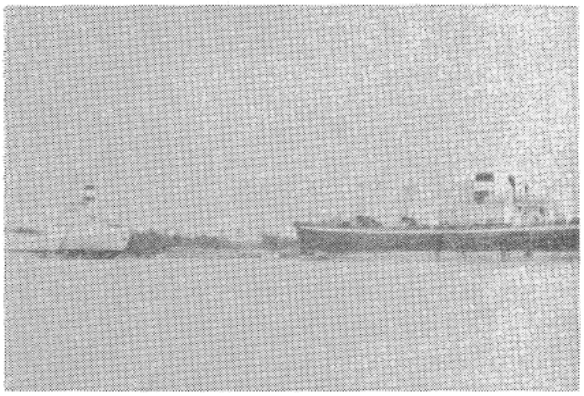

写真1　アラブ河に停泊する商船

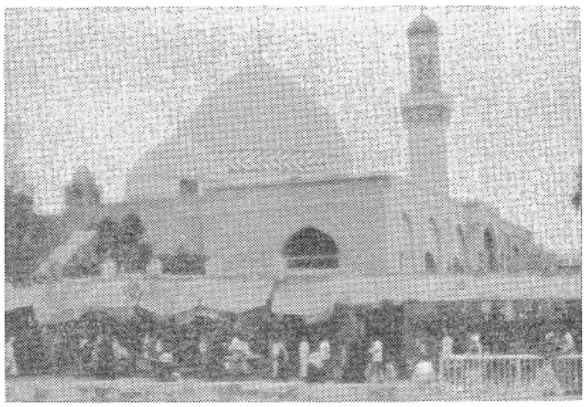

写真3　アシャール運河沿いのモスク

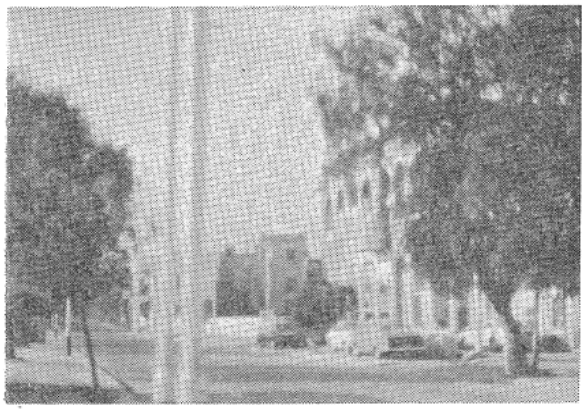

写真2　早朝のアラブ河岸道路

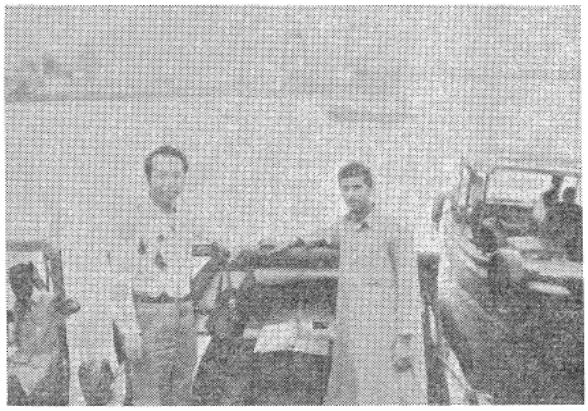

写真4　チャーターした渡し船と船頭さん

た．沙漠の道の両側には白く塩が析出した水溜りが延々と続くのみで，水は風景にうるおいを与えるものではなく，むしろ荒涼さを際立たせているかの如くであった．また，町外れの家々は泥水の中に浮んでいるようで，とても健康地とは思えなかったのである．

さて，バスラ大学のカイス博士に案内されたのは，この街の北端に孤立した豪華ホテルではなく，市の中心アシャール区にあるラフダン・パレスというホテルであった．恐らく豪華ホテルは予約出来なかった為と思われるが，筆者にとってはむしろ幸いであった．後に近くを歩いて見るとかなり多くのホテルが見受けられた．泊ったホテルの部屋は悪くはなかったが，大音響を発するウインド・クーラーを物ともせずに眠れる人でなければ一寸つらいかも知れない．またレストランは定評があるとの事であったが，ボーイはチキン，フイッシュ，ミート，と聞きにくるだけで，何を注文しても同じことであった．とも角，注文通りの料理は1回しか出てこなかったのには驚いた．どうやら出来たものから適当に運んでくるらしいのであったが，どこかの国のように1時間も待たされるよりは遥かにましであろう．ここで焼津の赤坂鉄工所という船用エンジンのメーカーから来たという日本人に会い，久し振りに最近の週刊紙を見せてもらった．

ホテルから10分も歩けば満々と水を湛えたアラブ河に出る．途中，ヨシヅで囲った青空ナイトクラブを発見したが，実地検分は遠慮した．河岸の道路は確かに水面から余り高くはないが，緑濃い街路樹で覆われた広い遊歩道を持つ美しい通りである．岸近くにはダウと呼ばれる古い型の木造帆船が数多く錨を下し，背後には威圧するように大型商船が何隻も停泊していた．目を街の方に向けると，河岸道路を挟んで，白い2～3階建のコロニアル風の建物が，ゆったりと庭をとって立並び，目を楽しませてくれる．

バラスには多くの運河があり，東洋のベニスと云われているとの事であるが，筆者は略図に示したアシャールの巾20m位の運河の一部しか

見る機会がなかった．数km西へ行けば古いアラブの木造建築を見ることが出来るそうである．アシャール運河からややアラブ河を下ったところに桟橋があり，大学フェリーと呼ばれるフェリーボートが対岸と絶えず往復して車や人を無料で運んでいる．バスラ大学は対岸の桟橋から1km程度離れた沙漠の中にあるが，キャンパス内は緑が豊かである．大学までの道路沿いには貧弱な部落があるのみで，もし嵐が来て，フェリーが欠航したらどうなるのか？などと余計な心配をした．

アシャール運河の北側にはモスクがあるが，写真に見られるようにモスクに接して数多くの店が立並び，西側から北側にかけてスーク（市場）となっている．ここに近づいた時，100m位離れたところでも強いカレーの匂いが漂っていた．イラクではそれまで全くカレーには縁がなかったので不思議に思ったが，よく考えて見るとバスラはインド文化との接点となっているので，内陸部のバグダードとは異なる雰囲気があるのは当然かも知れない．匂いの発生源を探し当てて見ると，それは香辛料店で，カレー粉が店先に無雑作に山のように盛上げられていた．香りが抜けてしまわないのだろうか？と思ったが，多分うまく行っているのであろう．

ホテルの近くにツーリズム・オフィスなる国営旅行社がある．ここで飛行機，ホテルの予約，観光案内等のサービスを受けることが出来るのであるが，地図は無かった．また回教国としては珍らしく人形を売っていた．粗雑な出来の割には値段が高いと思ったので値切ったところ，“国営の店ではバーゲンはしない”とあっさり撃退されてしまった．そのうち，掛員は筆者が日本人であることを知って，“バスラ，イラクと云って見ろ”とｒの発音テストを仕掛けて来た．“お前は出来た”と首をひねっていたので，“Japan”と云って見ろと切返してお返しをしておいた．アラビア語にはｐとｖの発音がなく，ｂとｆで代用することを知っていたからである．こんなやり取りは勿論，笑いながらの話で，イラクでも南部の人間は陽気でフザケるのが好きなのかも知れない．とも角，この掛員氏の助言によって，最後の日の午前の僅かな時間を利用して舟遊びをすることが出来たのである．

フェリー桟橋まで行くと，何艘も小型の屋形船が群がっていた．とある船の船頭にチャーター料を尋ね，例によって1時間1ディナールは高いと値切ったところ，“公定料金である”とあっさり撃退されてしまった．どうも腹の中を読まれたらしい．生憎，かなり雨が降り出したが，2時間丁度でシンドバット島の先端まで往復した．この島はバスラ市民のピクニック地の一つとなって居り，レストランも設けられて居る．船の速度や自動車の所要時間から割出すと桟橋と島との間は約10km位と思われる．島の先端から左方に進むと広大なアル・ハマールという沼に入るが，その入口附近で日本の浜辺と全く同じような地曳網漁を見物することが出来た．また川の中央に停泊している商船の中に4隻も日本の船が認められ，その中一隻は昭盛丸と船名まで読むことが出来た．港は機密保持地域になって居り，船頭は港の反対側のみを航行し，港附近ではカメラを片付けさせられてしまった．

バスラは湾岸地域の例に漏れず非常に蒸し暑い所と聞いて来たが，滞在中は意外に快適で，バグダードと変らなかった．カイス博士に聞くとそれは沙漠からの北風が吹いていたためで，風向きが変ると耐え難い蒸し暑さになるとの事であった．良い気候に当ったのは冷房装置の無い所で講演や講義をするには幸いであったが，風土の体験が半分しか出来ず残念であった．今後，機会があれば，盛夏にイラクを訪ねて見たいと思っている．

おわりに

以上でイラクの案内を終るが，この小文が今後，同国を訪問せんとする人にいささかでも役立ち，或はこれが機縁となって同国を訪れる人が出るならば筆者にとってこれ以上の喜びは無い．なお，(3)と(5)とに三箇所誤りを発見したので，ここで訂正しておく．

正　誤　表

巻	号	頁	欄	行目	誤	正
31	3	6	右	14	カーフェ	ガーフェ
32	1	7	右	15	侍	伝
32	1	8	右	下から10	東	西